

世界地誌シリーズ 6

ブラジル

丸山 浩明 編

朝倉書店

編集者

まる やま ひろ あき
丸山浩明 立教大学文学部

執筆者

() は担当

- | | |
|--------------------------|---------------------------------------|
| かた おか ひろ み
片岡博美 | 近畿大学経済学部 (10 章, コラム 10) |
| たか ば まさ み
高場将美 | 前 月刊「中南米音楽 (現 ラティーナ)」編集長 (6 章, コラム 6) |
| な むら ゆう こ
名村優子 | サンパウロ人文科学研究所日本特別研究員 (9 章) |
| に へい たか あき
仁平尊明 | 北海道大学文学研究科 (8 章, コラム 7, 8) |
| はぎ わら はち ろう
萩原八郎 | 四国大学経営情報学部 (3 章) |
| まる やま ひろ あき
丸山浩明 | 立教大学文学部 (1, 7, 9, 11 章, コラム 1, 3, 9) |
| み た ち よ こ
三田千代子 | 上智大学外国語学部 (4 章, コラム 4) |
| みや おか く に ひで
宮岡邦任 | 三重大学教育学部 (2 章) |
| やま だ まさ のぶ
山田政信 | 天理大学国際学部 (5 章, コラム 5) |
| や ま ち よ し かず
矢持善和 | 天理大学国際学部 (コラム 11) |
| よし だ けい い ち ろ う
吉田圭一郎 | 横浜国立大学教育人間科学部 (2 章, コラム 2) |

(50 音順)

ブラジルの著しい経済発展を支えているのが、豊富な鉱産資源とそれに支えられた鉱工業である。ブラジルの鉱産資源は鉄（Sumario Mineral による 2010 年の生産量：3 億 70000 万 t）をはじめとして、ボーキサイト（3200 万 t）、マンガン（232 万 t）、銅（21 万 t）、亜鉛（17 万 t）、ニッケル（6 万 t）、錫（1 万 t）など、世界でも有数の生産量を誇る（第 2 章参照）。また、先端産業で重視されるレアメタルでは、超伝導磁石に使われるニオブや、コンデンサの原料となるタンタルの産出量が多い。さらに金、エメラルド、トパーズ、アメジスト、ダイヤモンドなどの貴金属や宝石類も、植民地時代から大量に採掘されてきた。

ミナスジェライス州にあるイタピラ鉄山は、20 世紀中頃に開発された露天掘りの鉱山群である。そこで採掘された鉄鉱石は、約 500 km の鉄道によってエスピリトサント州のヴィトリア港へ輸送される。パラ州のカラジャス鉄山は、1980 年代の「大カラジャス計画」により開発された鉱山で、その開発には日本も政府開発援助で協力した。カラジャスの鉄鉱石は、アマゾンの熱帯林を切り開いて作られたカラジャス電気鉄道によって、約 900 km 離れたマラニョン州のサンリス港へ運ばれる。マツグロソドスル州のコルンバ鉄山は、ラプラタ川の河口から約 2400 km 上流に位置する。ここで採掘された鉄鉱石は、平底船でおもにアルゼンチンへ輸出される（写真 1）。現在、これら 3 つの鉄山は、鉄鉱石関係では世界最大のヴァレ社によって経営されている。ブラジルの鉄鉱石は、かつてはおもに日本とドイツに輸出されていたが、2000 年代には中国が最大の輸出先となった。

ブラジルはラテンアメリカ屈指の産油国である。最も大規模な油田は、リオデジャネイロ州にあるカンボス沖の海底油田である。ブラジルでは、1970 年代の石油危機の直後に海底油田の探索が始まり、まもなく

リオデジャネイロ沖で有望な油田が発見された。しかし約 2000 m の深海にあったため、開発できない状態が続いた。その後、掘削技術の進歩により 2000 年代に産出量が飛躍的に増加し、2006 年には石油の自給を達成した。リオデジャネイロに本社をおくペトロブラスは、石油の掘削、精製、輸送、販売を手がける多国籍企業に成長した。

20 世紀中頃のブラジルの経済は、コーヒーの輸出に依存したモノカルチャーであったが、1960 年代後半から海外の投資を積極的に受け入れて工業化が進み、ブラジルの奇跡と呼ばれる経済発展を経験した。そのときに発展したのは鉄鋼、造船、プラスチック、自動車などの重化学工業であり、いずれも輸入代替工業であった。1980 年代のブラジルは、石油危機の影響もあって海外からの投資が減少し、経済発展が滞ったため、失われた十年と呼ばれる不景気となった。しかし、農産物加工などの軽工業や研究開発部門は着実に成長していた。1990 年代後半からは機械工業や IT 産業が成長し、特に航空機や自動車などの工業製品が主要な輸出品となった。欧米や日本の自動車企業もブラジルに工場を建設し、アルコールでもガソリンでも走るフレックス燃料車や、いまだに需要の多いオートバイを製造している。

このように、BRICs の一員であるブラジルは工業国としての地位を高めつつあるが、急速な経済発展に伴う課題もある。都市では人口が急激に増加したため、大気汚染や水質汚染などにより、生活環境が悪化した。スラム、ストリートチルドレン、犯罪などの都市問題も深刻である。また、電力の 8 割以上を水力発電に頼っているが、大規模なダム開発によって、アマゾンの熱帯林をはじめとして、広い範囲で自然の植生が水没している。

〔仁平 尊明〕



写真 1 パラグアイ川に臨むコルンバ鉄山の河港（2006 年撮影）
平底船（写真左端）にベルトコンベアーで鉄鉱石が積み込まれている。

ブラジルは日本の約 23 倍という広い国土と 2 億の人口を有する大国である。各地にみられる多様な自然と文化は、ブラジル固有の観光資源となっている。中でも世界中から観光客を集めている観光地が、ユネスコの世界自然・文化遺産やリオデジャネイロなどの大都市である。本章ではまず、ブラジルを訪れる外国人観光客の特徴を、国籍と訪問州の資料から概観する（8.1 節）。次いで、ブラジルが世界に誇る観光地の特徴を、自然的観光地、文化的・都市的観光地とに分けて、地方ごとに紹介していく（8.2 節）。そして、近年盛んになってきた観光の事例として、地域の自然環境や文化を生かしたエコツーリズムの発展を分析する（8.3 節）。最後に、地方別の観光の実態とエコツーリズムの事例をふまえて、ブラジルにおける観光発展の課題を考察したい（8.4 節）。

8.1 観光の概要

ブラジルを訪れる外国人観光客は、1990 年代後半に急増した。ブラジル観光公社（EMB-RATUR）の資料によると、外国人観光客の年平均は、1980 年代が 159 万人、1990 年代前半が 150 万人だったのが、1990 年代後半には 349 万人となった。このように外国人観光客が増加した大きな要因は、ブラジル政府が観光に力を入れて、ヨーロッパやアメリカでの宣伝に力を入れたことや、経済発展に伴って各地の観光地が整備されたことにある。

2010 年にブラジルを訪れた外国人観光客は 516 万人であり、世界では第 45 位、南アメリカではアルゼンチンに次いで第 2 位となった（国連世界観光機関による）。ブラジル地理統計院（IBGE）の資料によると、外国人観光客の国籍は、アルゼンチンが 140 万人（27%）と突出して多く、次いでアメリカ（12%）、イタリア（5%）、ウルグアイ（4%）、ドイツ（4%）と続く（図 8.1a）。州（大陸）別でみると、南アメリカが 238 万（46%）と最も多く、次いでヨーロッパ（31%）、北アメリカ（15%）、アジア（4%）となる。日本人の観光客は 5 万 9000 人であり、国別では第 19 位であ

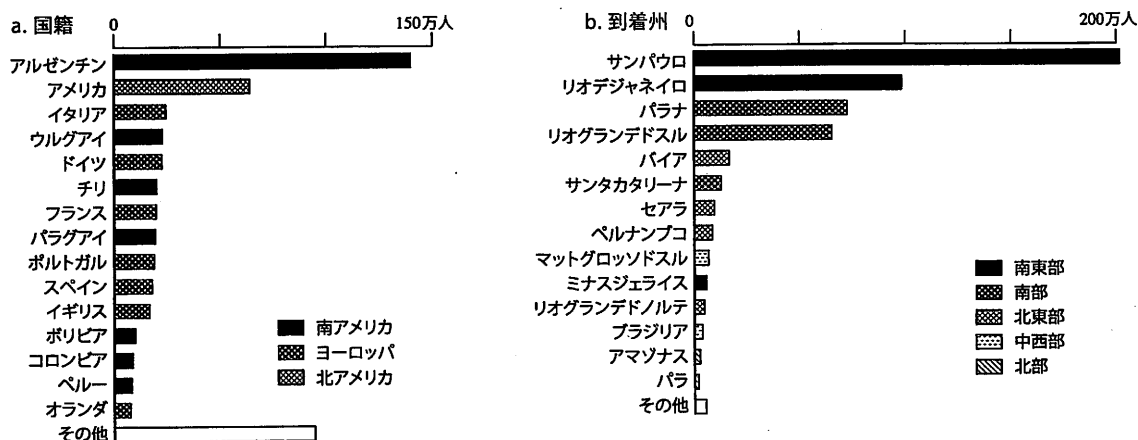


図 8.1 ブラジルを訪れる外国人観光客（2010 年）
IBGE の観光統計（Anuário Estatístico de Turismo）より。

った。このように、隣国のアルゼンチンをはじめとして、南アメリカとヨーロッパから訪れる観光客が多い。遠方からの観光客は少ないが、日本人移民を受け入れてきた歴史もあるため、アジアの中では日本からの訪問者が多い。近年では、現地生産工場の進出や貿易の拡大を背景に、韓国人と中国人の数も増加している（仁平 2008）。

外国人観光客の到着州をみると、サンパウロが 202 万人（39%）であり、以下、リオデジャネイロ（19%）、パラナ（14%）、リオグランデスル（13%）、パイア（3%）と続く（図 8.1b）。地方別では、南東部（59%）、南部（29%）、北東部（8%）、中西部（2%）、北部（1%）となる。大規模な国際空港のあるサンパウロとリオデジャネイロへは、空路によりヨーロッパ、南アメリカ、北アメリカから来る観光客が多いのに対して、南部のパラナとリオグランデスルへは陸路で来るアルゼンチン人が多い。

外国人観光客がブラジルを訪問する目的は余暇（46%）、友人の訪問（27%）、ビジネス（23%）である。さらに余暇の中では、海岸・リゾート地（60%）、自然・エコツーリズム（27%）、文化（9%）となる（2010 年）。旅行業者の数は 1 万 792 であり、内訳は南東部（47%）、南部（22%）、北東部（17%）、中西部（9%）、北部（5%）という順になる。これらの値から、外国人観光客の多くは、南東部や南部を玄関として、大西洋の海岸リゾートや自然を売りにした観光地に移動すると考えられる。

8.2 観光地と観光資源

本説では図 8.2 をもとに、ブラジルにおける観光資源の特徴を、自然的観光地（世界自然遺産）と文化的観光地（世界文化遺産、都市観光）の順にみていく。外国人観光客の入込み数と、旅行業者の数が多い地方の順に紹介する。

8.2.1 南 東 部

南東部大西洋岸の保護区群は、サンパウロ州とパラナ州に広がる。ここにはパラナ州のスベラグイ国立公園のほか、両州で 11 の州立公園が含まれる。緩衝地帯を含めた面積は 17 万 km² であ

り、四国とほぼ同じ大きさである。暖流であるブラジル海流の影響により、南回帰線よりも高緯度に位置するにも関わらず、熱帯林が広がる。マメ科の大きな木を含む多様な樹種からなる熱帯林には、カッシュクホエザルなどの霊長類のほか、ヒョウ、オセロット、ヤブイヌ、コウモリなど多種の哺乳類が生息している。サンパウロ州とパラナ州では 19 世紀にコーヒー園の開拓で広い森林が伐採されたが、この地域はブラジル高原と大西洋に挟まれた急崖のため森林が残された。

ディアマンティーナ歴史地区は、ペロオリゾンテから北に約 280 km、標高 1250 m の高地に位置する文化遺産である。ダイヤモンドという意味のこの町は、18 世紀前半にダイヤモンドの鉱脈の発見を機につくられた。当時、ミナスジェライス地方の北部一帯が、ディアマンティーナと呼ばれていた。現在はダイヤモンドは採掘されていないが、そのときに財を成した裕福層の邸宅や、彼らからの寄進によって作られたカトリック教会が数多く残されている。

ミナスジェライス州のオウロプレトは、1980 年にブラジルで最初に指定された世界遺産（文化遺産）である（写真 1.1 参照）。標高 1100 m に位置する坂の多い町であり、歴史的なカトリック教会やコロニアル様式の建物、石畳の広場や街路が残されている。その起源は、17 世紀末にゴールドラッシュの際につくられたピラリカという村である。ピラリカは 18 世紀に発展してミナスジェライス地方の首府となり、ブラジル独立後の 1823 年に、ここで産出される金の色にちなんでオウロプレト（黒い金）と改称された。オウロプレトで採掘された金は、宗主国のポルトガルから、毛織物の代金としてイギリスへ渡り、産業革命を推進させたといわれる。19 世紀に入ると金は枯渇し、その北西 100 km に作られた計画都市のペロオリゾンテに州都が移された。

ボンジェズドコンゴニャスの聖所は、ペロオリゾンテから約 90 km 南のコンゴニャスに位置する文化遺産である。ここは、1757 年に作られたボンジェズデマトジーニョス聖堂と、アレジャディーニョ（Aleijadinho、本名：Antônio

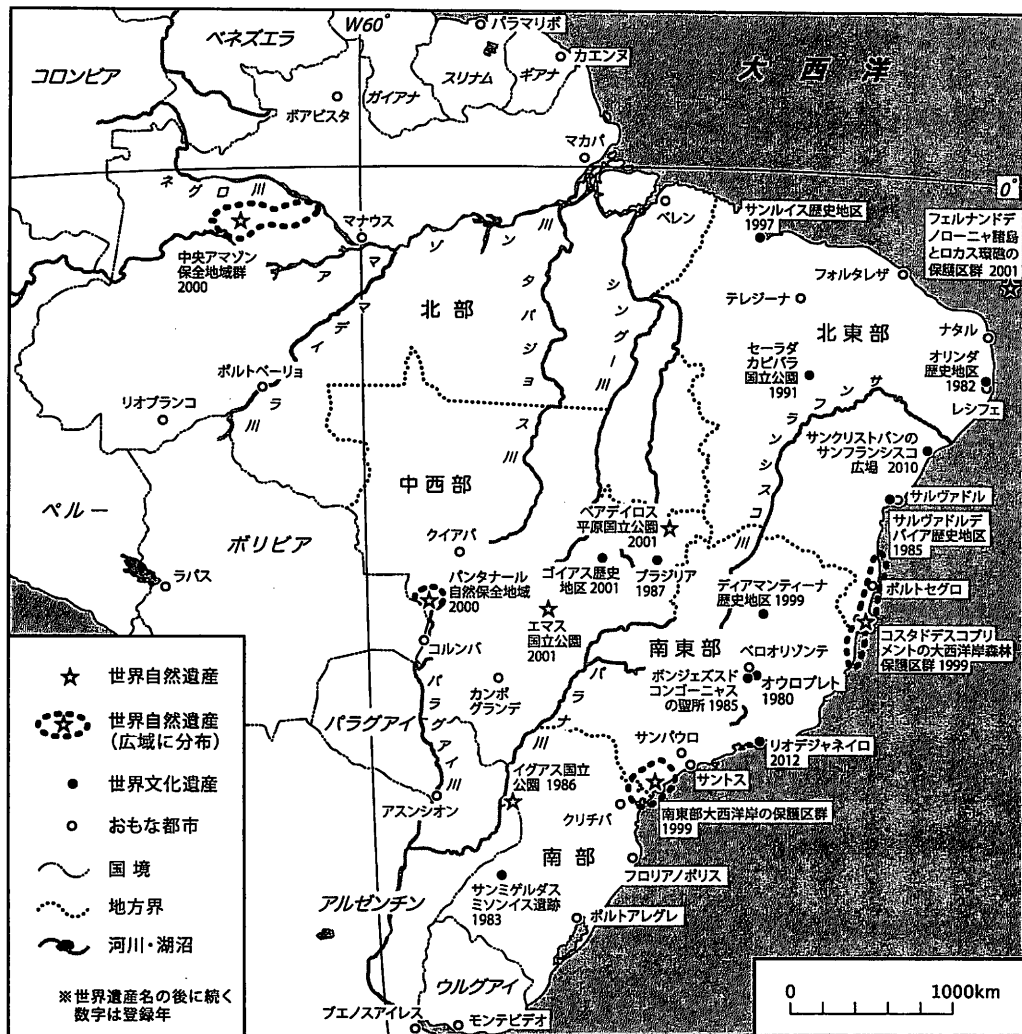


図 8.2 ブラジルの世界遺産とおもな都市 (2012 年)
 UNESCO 資料より。

Francisco Lisboa) による彫刻群によって世界遺産となった。聖堂を寄進したのは探検家で鉱山師のフェリシアノ・メンデス (Feliciano Mendes) であり、聖堂の名前は彼の故郷であるポルトガルの町にちなんでいる。アレイジャディーニョはバロック様式の有名な彫刻家であり、ブラジルのミケランジェロとも呼ばれている。彼の傑作とされるのが、聖堂の正面を飾る聖書の 12 予言者である。これらの石像は、この地方特産のやわらかい石蝸石で作られている。

リオデジャネイロの山と海に囲まれた景観は、2012 年に文化遺産に登録された (写真 8.1, 口絵 9 参照)。これは、2014 年のサッカーワールドカ

ップと 2016 年のオリンピックを控えて、国際的な観光地としての地位をさらに高めようとしたリオデジャネイロの取組みが認められたといえる。世界遺産となった景観は、チジュカ国立公園の山脈、グアナバラ湾の湾口にある人工海岸、ニテロイ港などを含む自然・文化の複合要素からなる。グアナバラ湾の湾口には、ボサノヴァの名曲に唱われたイパネマ海岸、リゾートホテルが林立するコパカバーナ海岸、花崗岩ドームのボンデアスカル (砂糖パンの意味) などの景勝地がある。また、チジュカ国立公園にあるコルコバードの丘には高さ 40 m のキリスト像が立っており、日本でもよく知られた観光地となっている。



写真 8.1 山と海に囲まれたリオデジャネイロの景観 (2012 年撮影)
ボンデアスーカルからコルコバードの丘をのぞむ。特徴的な形をした丘陵と海岸との間に市街地が広がる。手前のボタフォゴ湾 (グアナバラ湾の内湾) には多くのヨットが浮いている。

リオデジャネイロは人口 630 万 (2010 年) の、サンパウロに次ぐ大都市であり、盛大なカーニバルが開催されることで知られる。2 月中旬から 3 月上旬にかけて、リオデジャネイロではさまざまな規模のカーニバルが開催されるが、中でも有名なものが、サンボドロモ広場で開かれる競技会で、世界中で放映される。カーニバルの期間、港には外国人観光客を乗せてきた大型客船が何隻も停泊している。サッカー観戦もブラジル都市観光の醍醐味である。リオデジャネイロのマラカナンスタジアムは、1950 年のワールドカップで決勝戦が開催された競技場である。そのときはブラジル対ウルグアイの決勝戦でブラジルが逆転負けし混乱した観戦者が続出したため、マラカナンの悲劇と呼ばれている。2014 年に開催されるブラジルで 2 回目のワールドカップでも、ここで決勝戦が行われる予定である。ブラジルは国民 2 億がサッカー監督といわれるほどで、ワールドカップでブラジルの試合がある日には、会社や学校を休んで選手を応援するという (コラム 11 参照)。

サンパウロは南半球で最大の都市であり、人口は 1130 万 (2010 年) に達する。南回帰線上に位置するが、標高約 750 m の高地にあるため、比較的過ごしやすい。ブラジル経済の中心であり、

中心業務地区には、高層のオフィスビルが立ち並び、大企業の本社や銀行、多国籍企業の支店が集中する (写真 8.2)。サンパウロに滞在する観光客の多くはビジネスや修学・研究を主目的とするが、その一方で、西洋美術を収集したサンパウロ美術館 (MASP) や旧市街にあるカトリックのセー大聖堂、またスポーツ観戦や中心市街地での買い物など、都市観光ならではの見所も多い。ブラジル各地の料理ばかりでなく、移民が持ち込んだ各国料理のレストランも充実する。

日本人にとって大切な観光資源として、移民関係の施設や景観が挙げられる。サンパウロの中心部には、東洋人街 (かつては日本人街と呼ばれた) として知られるリベルダーデ地区のガルボンブエノがあり、日本語が通じる土産物屋、レストラン、ホテルのほか、各県人会や日伯文化協会の事務所などが並ぶ。日伯文化協会にはブラジル日本移民資料館が併設されており、移住地の生活から都市への移動など、移民とその子孫の歩みに関する資料が展示されている (第 9 章参照)。またサンパウロ移民博物館では、世界各地から集まった移民の歴史を知ることができる。

8.2.2 南部

アルゼンチンとの国境に位置するイグアス国立



写真 8.2 サンパウロの市街地 (2011 年撮影)

アルティーノアランテスの展望台から撮影したサンパウロ市街地。遠くまで高層ビルが林立するのがみえる。右手にみえるドームと2つの尖塔は、セントロ（旧市街）のカテドラル・メトロポリターナである。アルティーノアランテスは、パネSPA（サンパウロ州立銀行）の本社ビルとして、中心業務地区にある金融街に1949年に建設された。2000年に民営化されると、スペインの銀行に買収された。

公園は、1939年に制定され、1986年にはブラジルで最初の自然遺産になった。公園内にあるイグアスの滝は、世界屈指の大瀑布として知られる（コラム8参照）。アルゼンチン側も国立公園となっており、そちらは1984年に世界遺産に指定された。世界遺産の面積は、ブラジル側が1701 km²、アルゼンチン側が555 km²であり、合わせると東京都よりも広い。保護地域の多くは、パラナマツ（ブラジлмаツ、口絵10参照）などの針葉樹やアサイヤシなどのヤシを含んだ亜熱帯林であり、ホエザルなどの哺乳類や鳥類が多く生息している。ブラジル側のイグアス国立公園は、公園内に道路を建設する計画が持ち上がったために、1999年に「危機にさらされた世界遺産」に指定された。計画の撤回などの対処により、その不名誉な指定は2001年に解除された。

サンミゲルダスミソンイス遺跡は、1983年に単独で文化遺産に指定され、1984年にグアラニーのイエズス会伝道所群として再編成された。イエズス会は17世紀より、ブラジル南部、アルゼンチン北部、パラグアイ南部に住んでいた先住民のグアラニー族にキリスト教を布教した。ブラジルにおける布教の拠点となったのが、リオグラン

デドスル州のサンミゲルダスミソンイス（天使ミカエルの伝導所という意味）であった。サンミゲルダスミソンイス遺跡の見所は、18世紀前半に建設された大規模な教会の遺跡と、聖人の木像などを収蔵した博物館である。イエズス会が布教していた時代、開発者やバンデイルランテスなどの探検隊は先住民を奴隷労働力にしており、イエズス会はグアラニー族を組織して抗争を展開した。1767年にスペイン王カルロス3世（Carlos III）は、イエズス会をアメリカ大陸から追放し、各地の伝導所は廃れた。

ブラジルを代表する食文化に、シュラスコ（牛肉の串焼き、コラム1参照）とマテ茶がある。マテ茶は、お湯で入れるのをシマホン、水で入れるのをテレレと呼び、金属のストローでまわし飲む。これらは、リオグランデドスル州を中心とする南部のカウボーイ（ガウショ、図1.6、口絵13参照）たちによる畜産文化が起源である。他の地方と比べて冷涼な南部には、ドイツを始めとする北ヨーロッパからの移民も多い。サンタカタリーナ州のフロリアノポリスの郊外には、ドイツ風の町並みとオクトーバーフェスト（ビール祭り）で知られるブルメナウがある（写真1.4、口

絵12参照)。また、ブラジルはアジア以外では最大の米生産国であり、一般にインディカ米が食される。このインディカ米の最大の産地が、南部の河川沿いの低地である。

8.2.3 北 東 部

フェルナンドデノローニャ諸島とロカス環礁の保護区群は、火山島を含む約20の島からなる自然遺産である。ペルナンブコ州に属し、州都のレシフェから約600km北東に位置する。海鳥の大規模な営巣地として知られる。これらの島は、ポルトガル以外にイギリス、フランス、オランダの領土となった。ブラジル領になってからは流刑地となり、囚人が筏を作って脱走するのを防ぐために森林が伐採された。ロカス環礁は環礁海洋生物保護区となっており、観光客の立入りは少ない。

コスタデスコプリメントの大西洋岸森林保護区群は、バイア州からエスピリトサント州にかけて広がる海洋性の熱帯林である。その地名は、1500年にポルトガル人のペドロ・カブラルがこの付近に到着して、ブラジルを発見（デスコプリメント）したことに由来する。この世界遺産は8つの自然保護区からなり、その面積は1120km²である。世界一の鉄鉱石企業であるヴァレ社が管理する保護区もある。熱帯林には、ジャトバやアラサなどからなる回廊林、アサイヤシやブラジルゾウゲヤシなどのヤシ類、海岸部のマングローブなどがみられる。ブラジルボクやブラジリアンローズウッドも高い密度で生息している。ブラジルの語源となったブラジルボクはマメ科の高木であり、染料や楽器の原料とされ、16世紀には主要な輸出品であった。ブラジリアンローズウッドは硬くて模様が美しいため、家具や楽器向けに伐採が進んだが、現在ではワシントン条約により国際取引が禁止されている。

マラニョン州都のサンルイスには、サンルイス歴史地区がある。ここは、ブラジルの州都の中で唯一フランス人によって建設された街であり、その地名はフランス王ルイ13世（Louis XIII）に由来する。1615年にはポルトガル人が進出し、1641～1645年にはオランダ人によって支配された。その後は再びポルトガルの支配地となり、農

産物の輸出港となった。19世紀中頃にアメリカで南北戦争が起きると、イギリスへの綿花輸出が急増して町の経済が発展した。当時財をなした家は、ポルトガルから輸入したタイルで外壁を飾ったことから、サンルイスの旧市街地は「タイルの町」と呼ばれる。現在のサンルイスは、鉄鉱石と大豆の輸出港としても知られる。

ピアウイ州のセーラダカピバラ国立公園は、1991年に文化遺産に指定された。洞窟や岩壁に描かれたカピバラ、シカ、ジャガーなどの動物や、狩猟や儀式などの壁画で知られる。壁画は2万5000年前に描かれたものであり、南アメリカで最古の居住地跡とされる。公園内には侵食でつくられた奇岩群や、フサオマキザルなどの珍しい動物が生息するカーチング（有棘灌木林）があり、観光資源となっている。

ペルナンブコ州のオリンダ歴史地区は、ブラジルで2番目に登録された世界遺産である。地名の由来は「オリンダ・シチュアサン・パラセ・コンスツイル・ウマビラ（村をつくるのによい場所だ）」であり、植民地時代における開拓の拠点となった。1537年にカトリックのセー教会が建設されたのが、村の始まりとされる。17世紀前半にはオランダに支配されたため、オランダ風のコロニアル建築（植民地時代の建物）も残されている。17世紀後半に再びポルトガル領になると、オリンダは北東部における砂糖の集散地となった。その輸出港が現在の州都レシフェである。現在のオリンダの周囲には、経済発展の著しいブラジルの都市らしく、ビジネス、ホテル、マンション用の高層建築が立ち並んでいる。

セルジッペ州の前州都サンクリストバンでは、旧市街地にあるサンフランシスコ広場（聖クリストフォロスの町の聖フランチェスコ広場）が、2010年に文化遺産に指定された。この町は、スペイン・ポルトガル同君連合時代の16世紀末につくられた。ポルトガル風の町づくりは、自然の起伏に沿った曲がった街路が多いが、この町ではスペイン風の整然とした碁盤目状の街区がつくられた。サルヴァドルとレシフェの中間に位置する貿易港として発展したが、近代的な港の必要性が

ら、1855年に約20 km北に計画都市アラカジュが建設され、そこが州都となった。

サルヴァドルデバイア歴史地区は、サルヴァドル中心部の台地上に位置する旧市街地で、ブラジルで最も観光地化された文化遺産の1つである。サルヴァドルの街区は、初代ブラジル総督のトメ・デ・ソウザの時代（16世紀中頃）に建設された。石畳で作られた街路は坂道が多く、各所に教会と広場が配置されている。中でもサンフランシスコ教会、オルデンテルセイラデサンフランシスコ教会、バジリカ大聖堂など、17世紀に建設されたルネサンス式やバロック式の壮大な教会が見物である（写真8.3）。18世紀にブラジルで初めて作られた、黒人のためのロザリオオスプレートス教会もある。セー広場やトメデソウザ広場には、フィタ（日本でいうミサンガ）というリボンを配る婦人や、カポエイラを踊る若者のグループなどがある（口絵5参照）。

サルヴァドルは、人口約270万（2010年）であり、ブラジル第3位の都市である。18世紀後半にリオデジャネイロに首都が移転するまで、200年以上もポルトガル領ブラジルの首府だった。植民地時代における砂糖貿易の中心地であり、サトウキビ農場の労働力として大勢のアフリカ人が連れてこられた都市でもある。現在では、黒人の文化は重要な観光資源である。世界遺産に指定された旧市街には、アフリカ系文化を展示し



写真8.3 サルヴァドルのサンフランシスコ教会（2011年撮影）

サルヴァドルデバイア歴史地区を代表する教会である。18世紀のバロック式建築であり、内装の彫刻や祭壇に多くの金を使用されているため、黄金の教会と呼ばれる。

たアフロブラジル博物館がある。たとえばアフリカの宗教をもとに生まれたアフロブラジリアン宗教のカンドンブレ（第5章、口絵4参照）や、サンバの原型とされるカポエイラがある。打楽器のリズムに合わせて進められるカンドンブレの儀礼では、自然界を司る神霊がミディアムに憑依して信者と交流する。カポエイラは、黒人奴隷によってダンスとして練習された格闘技である。これらの文化は、現在では舞台での見せ物にもなっており、観光化されている。

8.2.4 中西部

セラード保護地域は、ベアデイロス平原国立公園とエマス国立公園からなる。両地域はゴイアス州の北西端と南西端に位置し、約800 kmも離れている。セラードは本地域特有のサバナ植生を意味するが、その様相は、草地が広がる草本サバナから、灌木が卓越する低木サバナ、樹木が生い茂るセラドン（seradão）に至るまで多様である（第2章参照）。セラード植生ではアンジーコ、ジャトバ、イペー、ベキ、ジェニバポなどの高木や、バクリ、バパス、プリチーなどのヤシが生えている。また、アリクイ、アルマジロ、サル、ジャガーなどの哺乳類や、レアなどの陸鳥、アナコンダなどの爬虫類が生息する。このような多様な動植物相が、セラード保護地域の重要な観光資源となっている。

パンタナールは世界最大級の熱帯湿原であり、マットグロッソ州、マットグロッソドスル州、ボリビア、パラグアイにかけて広がる（第2章参照）。地名はポルトガル語の「大きな湿地」に由来する。その面積は約23万km²（日本の本州に匹敵する）であり、ブラジル領パンタナールだけでも13.8万km²に達する。パンタナールの気候はサバナに属し、11月～5月の雨季と6月～10月の乾季とに大別される。年降水量は1100 mmほどであるが、周囲の高原や山脈に降った雨が流れ込んで、広い範囲が水没する。広大なパンタナールの中でも、マットグロッソ州とマットグロッソドスル州の州境からボリビアとの国境付近に広がるパンタナール国立公園と、その周囲の国定自然保護地区が、2000年に世界遺産のパンタナ

ル自然保全地域に指定された。世界遺産の面積は、香川県とほぼ同じ1880 km²に達するが、奥地にあるため訪れるのが難しい。

パンタナールは、雨季と乾季とで浸水域の面積が著しく異なるため、特有のビオトープ（野生動植物の生息空間）がみられる（写真2.7参照）。動物相は、哺乳類が80種、鳥類が650種、爬虫類が50種、魚類が400種であり、哺乳類以外は後述のアマゾンを上回るほどである。19世紀後半の開拓時代から肉牛の放牧がおもな産業として成立してきたが、20世紀の終わりにエコツアーの観光地として世界的に知られるようになった（8.3.2項参照）。パンタナールの周囲にも、シャパーダ・ドス・ギマランエスやボニートなどの有名な観光地がある。前者は山と滝の景勝地であり、後者ではシュノーケリングやトレッキングなどのエコツアーが盛んである。

中西部には連邦直轄区（面積5801 km²、三重県ほど）があり、その中央に首都ブラジリアが位置する。ブラジリアは1960年にリオデジャネイロから遷都された計画都市であり、わずか3年半の建設で首都となった（3.4節参照）。1987年に文化遺産に指定されているが、新しい都市としては異例のことである。南緯15°という低緯度にあるが、標高1200 mの高地にあるため、その気候は快適である。飛行機の形をしたブラジリアの市街地には住宅地区、ホテル地区、公園、娯楽地区などが配置されている。機首に相当する部分には大統領府、国会議事堂、最高裁判所、大聖堂（カテドラル・メトロポリターナ、口絵15参照）が置かれている。これらの建築物は、ブラジルが誇る建築家オスカー・ニーマイヤーによるものであり、その未来的なデザインで知られる。現在は、人口増加により計画都市の外側にも市街地が拡大し、朝夕は通勤ラッシュに見舞われるようになった。

ゴイアス歴史地区は、ブラジルで最も内陸にある文化遺産である。その起源は、18世紀初めにバンデイランテスによって築かれたピラポアデゴイアスという村である。その地名は、先住民のゴイアス族に由来する。村の誕生から間もなく、ゴ

ールドラッシュにより居住地区が拡大し、多くのカトリック教会が作られた。1937年に計画都市であるゴイアニアに遷都するまでゴイアス州の州都だったが、現在は人口約2万5000の小さな町である。古い民家にみられるスペイン瓦は、人の太ももに粘土を当ててかたどったものである。

8.2.5 北部

中央アマゾン保全地域群は、北部にある唯一の世界遺産である。マナウスからネグロ川を約200 km上流に遡った西側に位置し、ジャウー国立公園のほか、ママイラウラとアマナンの自然保護区、およびアナビーリャス・エコロジカルステーションからなる。その面積は約5.3万 km²（九州と四国を合わせたほど）であり、ブラジルで最も広い世界遺産である。遠隔地にあることや、国立公園内に入るには環境省の機関である環境・再生可能天然資源院（IBAMA）の許可が必要であるため、研究・教育、少人数のエコツーリズム、マスコミの取材など、観光は特定の目的に限定されている。世界最大の熱帯林が広がるアマゾン盆地は、二酸化炭素の吸収量が多いことから「世界の肺」にもたとえられる。その動植物相は多様であり、未確認の固有種も多い。遺伝資源ばかりでなく、薬品や工業原料としての利用価値も大きい。動物相は、哺乳類が120種、鳥類が411種、爬虫類が15種、魚類が15種とされる。魚類のピラルクーやデンキウナギ、哺乳類のカワイルカやマナティーなど、日本でも知られた動物も生息している。

アマゾナスの州都マナウスは、人口183万（2010年）に達する大都市である。アマゾン川の河口から約1500 kmも遡った中流域にあるにも関わらず、海拔はわずか90 mほどである。19世紀に天然ゴムやジュートの集散地として町が発展した。19世紀末に建設されたアマゾナス劇場は、ヨーロッパから運ばれた豪華な建材と装飾品で溢れたオペラハウスであり、当時の繁栄を偲ばせる建物である（写真1.3参照）。ゴム景気の衰退後、1967年に免税都市に指定されたことから、海外の企業が進出するようになった。ホンダ社、ヤマハ社、パナソニック社、ソニー社など日本企業も

進出しているため、ビジネス目的で訪れる日本人も多い。内陸部における交通と観光の拠点でもあり、アマゾン川の支流や河口付近を巡り熱帯雨林の動植物を観察するクルーズ観光や、川魚を狙うスポーツフィッシングも盛んである。

8.2.6 世界遺産の特色

これまでみてきたように、ブラジルでは広い国土に分布する多様な観光資源を活用しながら、世界遺産を中心に観光地が発達してきた。2012年時点では、12の文化遺産と7つの自然遺産がある。文化遺産は開発の歴史に関する観光地であり、海岸の都市ばかりでなく内陸にも多く分布することと、1980年代に半数の6件が指定されたことに特徴がある。1980年代のブラジルは経済の停滞期にあり、考古学的な発見を含めて、文化的な価値を世界に宣伝してきた。また、海岸部と内陸部の格差を小さくすることを国土開発の目標にしていたことなどが、当時の文化遺産に偏った世界遺産の登録につながったと考えられる。

自然遺産は、海岸沿いか内陸部に分布することと、7件中6件が1999年以降に指定されたことに特徴がある。飛躍的な経済発展を遂げた近年のブラジルでは、固有の自然環境を保護する動きが強くなった。たとえば世界中の研究者や環境保護団体から注目されているアマゾンや、世界中の野鳥観察者が訪れるパンタナールでは、大規模な自然保護区が設定されている。世界的な観光地であるイグアスの滝（コラム8参照）と比べて、1999年以降に指定された自然遺産はアクセスが難しく、保護地域の外部にホテルなどの観光施設が整っている場合が多い。

8.3 エコツーリズムの発展

8.3.1 エコツアー拠点の分布

ブラジルでは1990年代後半から自然を生かした観光に力を入れるようになった。その代表的な形態が、地域の環境や文化を学習する要素を取り入れたエコツーリズムである。2002年には、スポーツ観光省、および民間の非営利団体であるブラジリエコツアー協会により、エコツアー拠点が制定された。エコツアー拠点とは、エコツーリス

ムによる地域発展を見込んだ観光地でもある。ここでいうエコツアーには、山や海や川などの自然環境の中での散策・学習ばかりでなく、休養を目的とする滞在が含まれている。具体的には、徒歩でのトレッキング、乗馬、キャンプ、海水浴、湖水・河川浴、写真ツアー、スポーツフィッシング、ナイトツアーなどの観光がある。またエコツアー拠点では、自然環境の保護に加えて、観光用のインフラ整備、施設やサービスの充実、国内外への宣伝、それらの開発に伴う持続的な発展が目標とされる。

エコツアー拠点は2003年に最初の26地域が指定され、2012年には90まで増加した。その分布には、内陸には少なく海岸付近に集中するというように、偏りがある（図8.3）。これは、エコツアーが盛んになる以前から有名だった観光地が、エコツアー拠点に指定されたためである。たとえばフォルタレザ、ナタル、レシフェ、サンルイスの近郊にある海岸には、外国資本が進出して、ブラジルでも屈指の海岸リゾートが整備されている。内陸部にも、クルーズ船で知られるサンフランシスコ川などの観光地がある。また、数は少ないものの、文化的な観光地もエコツアー拠点になっている。たとえばパトリモニオ・ヒストリコ・クルトゥラル・マラニョン（サンルイスの旧市街）やセーラダカピバラなどである。

内陸にはエコツアー拠点は少ないものの、パンタナールやアマゾンなど、広範囲に広がり、世界的に知られた観光地が指定されている。特にパンタナールは、ドイツをはじめとするヨーロッパからの野鳥観察者が訪れるようになったこと、1990年代にブラジル政府がエコツーリズムのモデル地域として、ヨーロッパを中心に宣伝をしたことにより有名になった。世界遺産でもあるパンタナールは、ブラジルにおけるエコツーリズム発展の契機になった地域でもある（仁平 2003, Maruyama et al. 2005）。

内陸の州境や国境地帯は山脈や河川である場合が多いが、そこが景勝地であればエコツアー拠点に指定されている地域もある。たとえばトカンチンス州とマラニョン州の州境にあるシャパーダ・

のようにパンタナールの範囲は広いが、ホテルや農家民宿（ボウザーダ）などの観光施設が集積し、世界中から観光客が訪れるのは、南パンタナールのエストラダパルケ沿線と、北パンタナールのトランスパンタネイラ沿線である（図8.4）。中でも、大河川に隣接し、多様な観光を提供しているエストラダパルケに注目する。

エストラダパルケは、マットグロッソスル州のコロンバから、ポルトダマンガを経て連邦道路262号に至る道路であり、総延長は120 kmである。この道は、湿原の奥地で生産された牛をトラックで搬送するために、1970年代に整備された。当初はエストラダ・ボイアデイレ（牛街道）と呼ばれたが、沿線の観光発展に伴って、1993年にエストラダパルケという名前で州の保護道路に指定された。農場の生活物資や家畜を円滑に輸送するために、道路には74の木橋が設置されている。

エストラダパルケはパンタナールの下流域に位置するため、水量が豊富であり、鳥類、ワニやヘビなどの爬虫類、カピバラやカワウソなどの哺乳類など、水辺を生息地とする動物を頻繁にみる事ができる。鳥類のほかに観光客に人気があるのが、メガネカイマンやアナコンダなどの爬虫類である。ピラニアやランバリなどの小型の魚も豊富であり、竹竿に糸と針を付けた簡単な竿で容易に釣ることができる。ドラード、ピンタード、ツクナレなどの大型魚を対象とする釣りでは、生き餌のほかに疑似餌が使われる。

エストラダパルケ沿線には、2006年時点で19軒の宿泊施設がある（表8.1）。大別すると、大規模な施設を備えたホテル、既存の農家を改装した農家民宿（ファゼンダ・ボウザーダまたはエコロッジ）、スポーツフィッシングに特化した釣宿（ベスカリア）となる。以下、ホテル、農家民宿、釣宿の順に、経営の実態を説明する。

ホテルはいずれも大河川に面して専用の港を備えており、エコツアー専門のガイドと、モーターボートの運転手を雇っている。ホテルが提供するエコツアーは、農場の散策や乗馬、動植物観察の写真撮影ツアー、スポーツフィッシング、ナイト

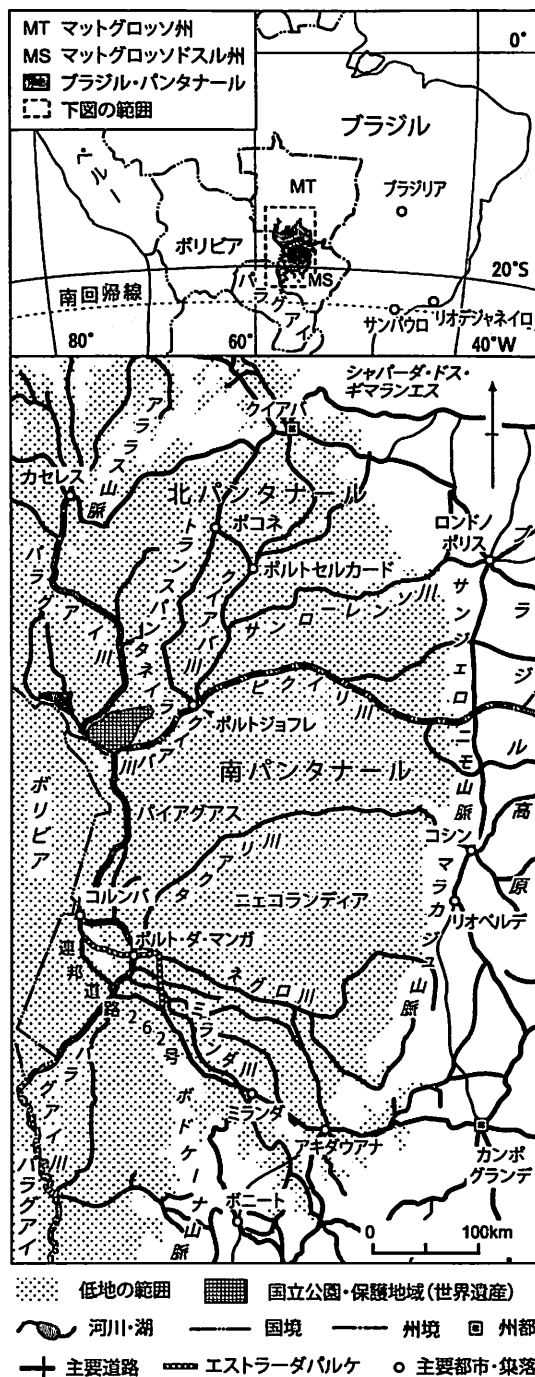


図8.4 パンタナールの範囲
IBGEの地形図をもとに作成。

ツアーなどである。エコツアーの場合、参加客が1人であっても必ずガイドが付いていく。たとえばパルケホテルとパンタナールパークホテルでは、散策、乗馬、写真撮影など、陸上のエコツアーがおもな観光となる。これらのホテルでは、宿

表8.1 エストラダバルケとその周辺における宿泊施設 (2003~2006年)

宿泊施設・ 農場の名前	観光業の 開始年	面積 (ha)	部屋 数	収容 人数	宿泊料金 (レアル/人)	備考
● ガバーナドントラ	1969	-	19	60	50	敷地は宿泊施設のみ
● サンタカタリーナ	1969	200	6	40	50	
● ソネットウール	1981	-	20	80	100, 150	敷地は宿泊施設のみ
● パッソドントラ	1982	-	14	30	45, 80	敷地は宿泊施設と商業施設 (レストラン、 ガソリンスタンド) のみ
● バルティクラ	1985	-	4	27	50	敷地は宿泊施設のみ
■ UFMS	1988	-	8	35	-	敷地は宿泊施設と研修施設のみ
○ ナトゥレーザ	1989	500	3	22	100	
★ クルピーラ	1989	-	13	83	125, 208-250	敷地は宿泊施設のみ
● タグシ	1993	8	17	65	110	
★ バンタナールパーク ホテル	1994	600	41	120	100, 275, 408	
★ バルケホテル	1997	190	18	74	191, 225	
● リオベルメーリョ	1998	7000	9	27	200	
● アララズール	2001	6000	30	90	130	農家民宿の敷地は 400 ha
○ ボアソルテ	2001	1040	-	60	85	
☆ サンジョアン	2001	1750	-	-	-	
● サンフランシスコ	2001	15000	8	32	65	宿泊業は 2003 年に開始
● ベーラピスタ	2002	1760	10	26	97.5	
● シャラエス	2004	4000	17	46	200	農家民宿の敷地は 350 ha
○ エコロジカルエクス ペディションス	2005	-	12	24	35, 70	敷地は宿泊施設のみ
● サンタクララ	2005	1700	11	30	60	

現地調査より作成。

●：釣宿 (ベスカリア), ○：キャンプ場, 簡易宿泊施設, ★：ホテル, ●：農家民宿 (ファゼンダ・ポウザーダ, エコロッジ), ☆：バルケホテルが購入した観光用農場 (ファゼンダ), ■：大学の研究施設。

泊客の約 9 割が外国人である。彼らは 3 泊 4 日のバックツアーで滞在することが多い。一方、パラグアイ川に面するクルピーラでは、スポーツフィッシングがおもな観光となる。こちらは宿泊客のほとんどがブラジル人グループのリピーターである。いずれのホテルも観光のピークは、長期休暇をとる人が滞在する 12 月と 7 月である。

農家民宿は、牛を飼育していた農場が観光業を始めた宿泊施設である。その面積は数百~1 万 5000 ha までさまざまである。傾斜地が多くてよい牧草が育たないベーラピスタ以外は、現在でも牛を飼っている。また、すべての農家民宿で乗馬用の馬を飼育している。エストラダバルケの農家民宿の所有者は、開拓時代からの農場主 (ファゼンダイロ) の家系ではない。売りに出された農場を購入して観光業を始めた事業主が中心であり、遠方の都市や外国出身の所有者が多い。観光業を始める際には、母屋を客室に改装したり、エコツアーのガイドと契約したりする必要がある。

農家民宿に滞在するのは 50~80% が外国人観光客である。年間の宿泊客数は 250~1000 人であり、宿泊施設の中ではキャンプ場と並んで数が少ない。おもな宿泊客は、家族や友人などの少人数のグループであり、平均的な滞在は 3~4 日である。観光のピークは、ホテルと同じ 12 月と 7 月である。農家民宿が提供するおもなツアーは、散策、乗馬、ナイトツアーなどであるが、敷地内に川や湖を含むため、ボートツアーも提供している。しかしスポーツフィッシングはあまり宣伝していない。いずれの農家民宿もエコツアー専用のガイドを雇っている。中には、生態学や IT の専門家を雇用したり、WWF による野生動物保護計画に参加する農家民宿もある。エストラダバルケにおける農家民宿の成功を受けて、ニエコランディアなどの内陸部やミランダなどの支流沿いにも農家民宿が開業した。

釣宿はすべてパラグアイ川とミランダ川に沿って立地する。この地域は河川漁業が盛んであり、

スポーツフィッシングも1960年代に始まった。現存する釣宿も、エコツーリズムがブームになる以前の1960年代と1980年代に営業を始めた。滞在する観光客は、おもにヨーロッパを中心とする外国人と、サンパウロからやって来るブラジル人のグループである。その割合は、釣宿によって異なるがおおむね半分ずつである。大規模な釣り宿ではツアー客などの団体客も受け入れるが、収容人数が30人以下の小規模な釣宿では、家族や友人などの小グループの滞在が主である。1年間の述べ宿泊客数は数百～2000人であり、平均すると農家民宿やホテルよりも多い。宿泊料は、他の施設と比べて半値以下である場合が多い。観光のピークは、カーニバルによる連休がある2月下旬～3月上旬、祝日や学校が休みになる7月～9月である。資源保護のために禁漁期間となる10月末から2月にかけては、休業する釣宿もある。

エストラダパルケ沿線では、これらの3類型の施設以外に、キャンプ場と素泊まり用の簡易民宿が3軒、およびホテルに付随した観光用の農場、大学の研修施設が1軒ずつ立地する。最近では、外国人の若者のバックパッカーが増加しており、キャンプ場の滞在客が増えている（仁平2011）。

8.4 観光業の可能性と課題

ブラジルの初期の観光は、カーニバルや海岸リゾートに代表されるように、海岸部の都市や近郊において発展した。1980年代に入ると、植民地時代の町並みなどが世界遺産に登録されたことにより、内陸部にも世界に知られる観光地が作られた。1990年代以降は、豊かな自然を売りにしたエコツーリズムなどの観光が盛んになった。たとえばパンタナールやアマゾン川などが挙げられる。2003年には観光省が設立され、観光発展がさらに重視されるようになった。各地の多様な自然を売りにしたエコツアー拠点の指定もその一環である。また、環境・再生可能天然資源院は、個人の土地を自然遺産の個人保留地（RPPN）に指定することで、税金を安くするなどの法制度をとっている。そのため観光地とその周辺を中心に、

農家民宿の地主などによる自然遺産の個人保留地の登録が増加している。

また、近年の経済発展に伴って、オリンピックやサッカーワールドカップなどの国際的なイベントが続くことから、都市における観光関連施設の整備も進んでいる。イベントを目的に訪れた外国人の多くは、海岸や内陸の観光地も訪れると予想されることから、ブラジルの観光業はますます発展する可能性がある。しかし、急速な観光開発に伴う課題も多い。以下、都市と農村に分けて、観光発展の課題を考えてみたい。

都市の観光地においては治安の悪さが問題となる。ブラジルの社会は伝統的に貧富の格差が大きく、貧しい住民はファヴェーラと呼ばれるスラムに居住している。ファヴェーラは、傾斜地や河川敷などの空き地を貧しい住民が不法占拠して作られ、上下水道や電気などが整備されていないことも多い。名画『黒いオルフェ（Orfeu Negro）』（1959年）の舞台にもなったように、ファヴェーラはブラジルの都市ではありふれた存在である。リオデジャネイロであればGoogleEarthでも多数のファヴェーラを確認できるし、ファヴェーラをめぐるツアーもあるが、外国人の観光客が安易に訪れるのは危険である。都市や海岸などの旧来の観光地では、周囲の安全性を高めて、観光地のいっそうのブランド化を進めていく必要がある。

近年では、都市の郊外に低所得者向けの公団住宅の建設が進んできたが、依然として大都市の内部には治安の悪い地区がある。たとえばサンパウロには旧市街、東洋人街、移民資料館などの日本人が多く訪れる観光地があるが、それらに隣接して治安のよくない地区（ファヴェーラではない）が点在している。また、自家用車所有率の上昇に伴う交通渋滞や事故の増加、下水や排気ガスによる都市環境の悪化も懸念されている。特に環境問題は、都市に近接する海岸リゾートで問題になっている。今後は、周辺地域や周辺産業との連携をふまえながら、持続可能な観光発展を考えていく必要がある。

農村においては、環境の保護と開発のバランスが課題である。観光開発の負の側面として、観光

客の増加によるゴミ処理、観光道路開発による野生動物の轢死などが挙げられる。経済発展に伴う電力需要の増加は、水力発電ダムの建設を促し、景勝地や森林の消滅につながる。また、農村における急進的な環境保護活動は、必ずしも観光発展に結びつかない場合がある。パンタナールでは河川流路の人工的な維持が法律で禁止されたことにより、広い土地が水没して、通年の浸水地となった。その結果、牧草地が減少して農場の閉鎖が相次ぎ、伝統的な牧畜が維持できなくなった地域も出ている。

パンタナールなどの急速に観光が発展した地域では、観光施設への外部からの投資が増えている。同時に、地域外出身のオーナーやガイドも増加しており、地域住民がエコツアーにうまく参画できないという課題もある。エコツアーをはじめとする農村の観光が持続的に発展していくために

は、マニュアルどおりのガイドではなく、牧童やインディオの生活様式などの文化的側面も重視した、内発的な観光発展を進めていく必要がある。また、個人のバックパッカーやアジアからの観光客など、多様化する観光客への対応も必要である。
[仁 平 尊 明]

引用文献

- 仁平尊明 (2003) : エコツーリズム——観光業の発展と場所特性の変化. 地理, 48 (12) : 30-37.
- 仁平尊明 (2008) : ブラジルのエスニック社会. 山下清海編『エスニック・ワールド——世界と日本のエスニック社会』98-108, 明石書店.
- 仁平尊明 (2011) : ブラジル・南パンタナールにおける観光業の導入と発展. 地理空間, 4: 18-42.
- Maruyama, Hiroaki, Nihei, Takaaki and Nishiwaki, Yasuyuki (2005) : Ecotourism in the north Pantanal, Brazil: regional bases and subjects for sustainable development. *Geographical Review of Japan*, 78: 289-310.

ブラジルとアルゼンチンの国境に位置するイグアスの滝は、南アメリカ大陸で最も有名な観光地の1つである。アメリカとカナダの国境にあるナイアガラ滝、ジンバブエとザンビアの国境にあるビクトリアの滝と並んで、世界三大瀑布の1つとして知られる。イグアスとは、先住民グアラニー族の言葉で、大きな水（アスー・イゴア）を意味し、聖地としてあがめられていた。16世紀の中頃にスペイン人の探検家カベサ・デ・バカ（Álvar Núñez Cabeza de Vaca）により、この滝がヨーロッパ人に知られるようになった。

イグアスの滝は、パラナ川支流のイグアス川にかかる。その大きさは幅4 km、落差80 mで、大小約300の滝からなる。最大の滝が、上流部に位置する「悪魔のど笛（garganta do diabo）」で、その幅は155 mもある（写真1）。2つの玄武岩層に滝がかかるため、2段に分かれて水が流れ落ちるのを見ることができる。玄武岩を母材とするテラローシャは肥沃な赤紫色であり、イグアス滝を含むブラジル南部では大豆やトウモロコシの生産に、パラナ川の上流部ではサトウキビやコーヒーの栽培に最も適した土壌とされる。

イグアスの滝には、アルゼンチン側にもブラジル側にも遊歩道が作られている。悪魔のど笛の辺りでは川の上にも遊歩道が延びており、大瀑布を上から間近にみることができる。遊歩道を散策する観光ばかりでなく、滝壺にせまるゴムボートや森林トレッキングな

どのツアーもある。また、ブラジル側からはヘリコプターで上空を散策することができ、アルゼンチン側では鉄道で滝と周囲をまわることもできる。

イグアスの滝をブラジル側から観光するときには、ビジターセンターから国立公園内を巡る専用バスに乗って、遊歩道の入口か、悪魔のど笛の近くにあるエレベーター付き展望台まで移動する。遊歩道の入口で降りれば、いくつかの展望台を経由しながら、悪魔のど笛に近づいていく散策を楽しむことができる。また遊歩道の入口には、ゴムボートや森林トレッキングなどのツアーの受付もある。ライフジャケットとカップを着て、水しぶきを浴びながら滝壺まで移動するボートツアーに参加すれば、イグアスの滝の大きさを間近に感じることができる。

滝の周囲にある保護林をまわる森林トレッキングは、専門のガイドがつくエコツアーであり、大西洋岸の亜熱帯雨林（mata atlântica）でみられる動植物の詳しい説明を聞ける。ここでは針葉樹やヤシ類などのほかに、シダやランなどの植物がみられる。モンステラ（Costela-de-adão、アダムの肋骨の意味）など、日本では観葉植物になっている植物も周囲に自生している。また、トカゲやヘビなどの爬虫類、コウモリやハナグマなどの動物もみることができる。滝の裏側に巣を作るアマツバメも、イグアスの滝ならではの鳥である。

イグアスの滝の周辺には、世界最大級のイタイプーダムや、バラグアイにある国境の町シウダデルエステなどの観光地がある。イタイプーダムは発電用のダムであるが、夜にはライトアップされるためナイトツアーも盛んである。イタイプーダムがある場所には、かつてセッテケーダスという7つの滝からなる景勝地があったが、ダムの完成により水没した。また、バラグアイは関税が安く、外国製の家電製品や自動車の部品などが安く手に入るため、ブラジル人やアルゼンチン人が、シウダデルエステまでショッピングツアーに訪れる。なおバラグアイは、他国との関税の共通化を進めないことや、政治が不安定であるなどの理由により、2012年に南米南部共同市場（メルコスール）から除名されている。

〔仁平 尊明〕



写真1 イグアスの滝（2003年撮影）

上流部の悪魔のど笛をみることができる展望台は、世界中から訪れる観光客で賑わっている。雨季の10月～2月は水量が多く、迫力のある大瀑布がみられる。

編集者略歴

まる やま ひろ あき
丸山 浩明

1960 年 長野県に生まれる

1989 年 筑波大学大学院地球科学研究科博士課程修了

現 在 立教大学文学部教授
理学博士

世界地誌シリーズ 6

ブ ラ ジ ル

定価はカバーに表示

2013 年 10 月 15 日 初版第 1 刷

編集者 丸 山 浩 明

発行者 朝 倉 邦 造

発行所 株式会社 朝 倉 書 店

東京都新宿区新小川町 6-29

郵便番号 162-8707

電話 03(3260)0141

FAX 03(3260)0180

<http://www.asakura.co.jp>

〈検印省略〉

© 2013 〈無断複写・転載を禁ず〉

シナノ印刷・渡辺製本

ISBN 978-4-254-16926-3 C 3325

Printed in Japan

 <(社)出版者著作権管理機構 委託出版物>

本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。複写される場合は、そのつと事前に、(社)出版者著作権管理機構(電話 03-3513-6969, FAX 03-3513-6979, e-mail: info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。